

数 学

1 学習評価の改善・充実

(1) 学習評価の改善の基本的な考え方

新学習指導要領において、学習評価は学習指導とともに学校の教育活動の根幹であり、カリキュラム・マネジメントの中核的な役割を担っていると示されている。

各教科等の目標及び内容は、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理され、これを踏まえ、観点別学習状況の評価については、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理されている。

これらの観点については、単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場を適切に組み立てていくことが重要であり、観点別学習状況の評価では十分に示しきれない、生徒のよい点や可能性、進歩の状況等については、日々の教育活動や総合所見等を通じて積極的に生徒に伝えることが必要である。

このように、学習評価は、指導と評価の一体化の観点からも、学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうものであることが求められている。

(2) 評価の観点及びその趣旨

観 点	趣 旨
知識・技能	・ 数学における基本的な概念や原理・法則を体系的に理解している。 ・ 事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けている。
思考・判断・表現	数学を活用して事象を論理的に考察する力、事象の本質や他の事象との関係を認識し統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を身に付けている。
主体的に学習に取り組む態度	・ 数学のよさを認識し積極的に数学を活用しようとしたり、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断したりしようとしている。 ・ 問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善しようとしたりしている。

(3) 評価規準の設定

評価規準の作成に当たっては、各学校の実態に応じて目標に準拠した評価を行うため、観点別学習状況の評価の対象とするものについて整理した「評価の観点及びその趣旨」を踏まえ、科目の目標に対する「評価の観点の趣旨」を作成する必要がある。

次に、学習指導要領に示す各科目の「2 内容」において示された「内容のまとまり」ごとに育成を目指す資質・能力の記載を踏まえて、「内容のまとまり」と「評価の観点」との関係性を確認しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を設定する。

さらに、「内容のまとまりごとの評価規準」を基に、単元の評価規準を作成する。その際、「内容のまとまりごとの評価規準」をそのまま単元の評価規準に位置付けることや、学習指導で取り上げる問題や題材に即して設定することなども考えられる。

なお、「主体的に学習に取り組む態度」については、教科の特性によって単元や題材など内容や時間のまとまりは様々であること、生徒が学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとする意思的な側面があることから、各科目の「1 目標」を参考にして「内容のまとまりごとの評価規準」を作成し、その考え方を踏まえて単元の評価規準を作成する必要がある。

(4) 観点別学習状況の評価についての実施上の留意点

学校においては、生徒の多様な可能性を伸ばしていくという視点から、多様な活動の機会を通じて、それぞれの生徒に成長のきっかけを与えるとともに、多様な学習活動における学習の成果を的確に見取り、生徒一人一人に対応した指導の改善につなげていく取組が重要となるため、知識量のみを問うペーパーテストの結果や、特定の活動の結果などのみに偏重した評価とならないように留意する必要がある。

例えば、多様な学習活動として、授業の終わりに、生徒がその授業を振り返って、大切なことや疑問などをタブレットを活用し、クラウド上に整理するなどICTを効果的に活用して記録することや、生徒が一定の内容のまとまりごとに振り返り、どのような学習が必要かを考えたり、「数学的な見方・考え方」を豊かで確かなものとして実感したりすることなどが考えられる。

また、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行うためには、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を充実させることが必要である。

なお、日々の授業の中では生徒の学習状況を把握して指導に生かすことに重点を置きつつ、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の評価については、原則として単元のまとまりごとに、それぞれの実現状況が把握できる段階で行う必要がある。

(5) 観点別学習状況の総括の進め方

ア 単元の総括

観点別学習状況の評価に係る記録の総括の時期としては、単元末、学期末、学年末等の節目が考えられる。単元における総括は、記録に残した評価が中心となるが、学習の過程における生徒の優れた状況を捉えるなどして資料に加えることは大切である。

総括の方法の例として、「評価結果のA、B、Cの数を基に総括する方法」、「評価結果のA、B、Cを数値に置き換えて総括する方法」、「学習の深まりや高まりの変化を重視する総括の方法」を示す。

(ア) 評価結果のA、B、Cの数を基に総括

観点	小単元				単元の評価
	①	②	③	④	
知識・技能	A	B	A	A	A
思考・判断・表現	C	B	A	A	A
主体的に学習に取り組む態度	B	B	A	B	B

(イ) 評価結果のA、B、Cを数値に置き換えて総括

観点	小単元				単元の評価
	①	②	③	④	
知識・技能	A (3)	B (2)	A (3)	A (3)	A (2.8)
思考・判断・表現	C (1)	B (2)	A (3)	A (3)	B (2.3)
主体的に学習に取り組む態度	B (2)	B (2)	A (3)	B (2)	B (2.3)

※ A = 3点、B = 2点、C = 1点として、平均値を算出

※ 【A】 2.5 < (平均値)、【B】 1.5 ≤ (平均値) ≤ 2.5、

【C】 (平均値) < 1.5

(ウ) 学習の深まりや高まりの変化を重視して総括（評価結果の後半を重視して総括）

観 点	小 単 元				単 元 の 評 価
	①	②	③	④	
知 識 ・ 技 能	A	B	A	A	A
思 考 ・ 判 断 ・ 表 現	C	B	A	A	A
主 体 的 に 学 習 に 取 り 組 む 態 度	B	B	A	B	B

また、上記以外にも、特定の時点に重きを置いて評価を行うなど、様々な総括方法が考えられるが、評価の総括は、各学校において定めた適切な方法によるものとする。

(エ) 特定の時点に重きを置いて総括

観 点	小 単 元					単 元 の 評 価
	①	②	③	④	⑤	
知 識 ・ 技 能	C (1)	B (4)	B (2)	A (6)	B (2)	B (2.1)
思 考 ・ 判 断 ・ 表 現	C (1)	C (2)	B (2)	B (4)	A (3)	B (1.7)
主 体 的 に 学 習 に 取 り 組 む 態 度	B (2)	B (4)	A (3)	A (6)	B (2)	B (2.4)

※(エ)について、A = 3点、B = 2点、C = 1点として、平均値を求めているが、小単元②と小単元④は、2倍の重みを付けて評価している。

【A】 $2.5 < (\text{平均値})$ 、【B】 $1.5 \leq (\text{平均値}) \leq 2.5$ 、【C】 $(\text{平均値}) < 1.5$

イ 評定への総括

評定は、観点別学習状況の評価を総括した数値を示すものであるとともに、生徒の学習状況の把握と、教師の指導や学習の指導に生かすことを可能とするものである。

観点別学習状況の評価の評定への総括は、各観点の評価結果をA、B、Cの組合せ、又は、A、B、Cを数値で表したものに基づいて総括し、5段階で表すが、評価結果のA、B、Cについては、学習の実現状況には幅があることから、機械的な評定の算出は適当ではない場合も想定されるので、A、B、Cの組合せから評定に総括する場合、各学校において、AAA、BBB、CCC以外の場合に適切に評価できるように総括の方法をあらかじめ決定しておく必要がある。

各観点の評価結果を5段階で表す方法である「A、B、Cの組合せにより総括する方法」、「A、B、Cを数値で表したものに基づいて総括する方法」を示す。

(イ) 評価結果のA、B、Cの数を基に総括

	知	思	態	評定
生徒a	A	A	A	5 又は 4
生徒b	A	A	B	4
生徒c	A	B	B	4 又は 3
生徒d	B	B	B	3
生徒e	C	C	B	2

(ロ) 評価結果のA、B、Cを数値に置き換えて総括

	知	思	態	評定
生徒a	A (5)	A (5)	A (5)	5
生徒b	A (5)	A (5)	B (3)	4 (4.3)
生徒c	A (5)	B (3)	B (3)	4 (3.6)
生徒d	B (3)	B (3)	B (3)	3
生徒e	C (1)	C (1)	B (3)	2 (1.6)

※A = 5点、B = 3点、C = 1点として算出

※換算 $1 < 1.5 \leq 2 < 2.5 \leq 3 < 3.5 \leq 4 < 4.5 \leq 5$

評定は、生徒の学習状況について5段階に分類したものとして捉えるものではない。生徒の具体的な学習の実現状況を適切に捉えた上で評定への総括を検討するとともに、観点別学習状況の評価の観点ごとの総括及び評定への総括の考え方について、教師間で共通理解を図り、生徒及び保護者には十分説明し理解を得ることが大切である。

2 新学習指導要領における指導と評価の計画例

(1) 「内容のまとめりごとの評価規準」を基にした単元の評価規準の計画例

「数学Ⅰ」の「二次関数」における「内容のまとめりごとの評価規準」を基に、学習指導で取り上げる問題や教材等に即してより具体的に設定し、「二次方程式と二次不等式」の単元の評価規準などを作成する例を示す。

「二次関数」における「内容のまとめりごとの評価規準」		学習指導要領の「思考力、判断力、表現力等」で示された内容をもとに、その文末を「～することができる」として、評価規準を作成する。
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する際のポイント</p> <p>学習指導要領の「知識及び技能」で示された内容をもとに、その文末を「～することができる」「～することができる」などとして評価規準を作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 二次関数の値の変化やグラフの特徴について理解している。 二次関数の最大値や最小値を求めることができる。 二次方程式の解と二次関数のグラフとの関係について理解している。 二次不等式の解と二次関数のグラフとの関係について理解し、二次関数のグラフを用いて二次不等式の解を求めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 二次関数の式とグラフとの関係について、コンピュータなどの情報機器を用いてグラフをかくなどして多面的に考察することができる。 二つの数量の関係に着目し、日常の事象や社会の事象などを数学的に捉え、問題を解決したり、解決の過程を振り返って事象の数学的な特徴や他の事象との関係を考察したりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 事象を二次関数の考えを用いて、考察するよさを認識し、問題解決にそれらを活用しようとしたり、粘り強く考え数学的論拠に基づき判断しようとしたりしている。 問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとしている。 <p>「主体的に学習に取り組む態度」の観点の趣旨をもとに、その文末を「～しようとしている」として評価規準を作成する。</p>

ア 単元（二次方程式と二次不等式）の目標

- (ア) 二次方程式や二次不等式についての基本的な概念や原理・法則を体系的に理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付ける。
- (イ) 関数関係に着目し、事象を的確に表現してその特徴を表、式、グラフを相互に関連付けて考察する力、事象の本質や他の事象との関係を認識し統合的・発展的に考察する力を身に付ける。
- (ウ) 二次方程式や二次不等式を活用した問題解決において、数学のよさを認識し積極的に数学を活用しようとする態度、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとする態度、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付ける。

イ 単元（二次方程式と二次不等式）の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ①二次方程式の実数解の個数が判別式の正負によって決まることを理解している。 ②二次方程式の解と二次関数のグラフとの関係について理解している。 ③二次不等式の解と二次関数のグラフとの関係について理解している。 ④二次関数のグラフを用いて二次不等式の解を求めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①二次関数のグラフと x 軸との共有点の個数について、判別式や頂点の y 座標を用いて多面的に考察することができる。 ②二次関数のグラフと x 軸との共有点に着目し、様々な二次不等式の解について体系的に考察することができる。 ③様々な二次不等式の解き方を振り返って、二次不等式を活用して問題を考察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①二次方程式、二次不等式について、考察するよさを認識し、問題解決にそれらを活用しようとしている。 ②二次方程式、二次不等式を活用した問題解決において、粘り強く考え数学的論拠に基づき判断しようとしたり、問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとしている。

※各学校においては、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方を踏まえて、各学校の実態を考慮し、単元の評価規準等、学習評価を行う際の評価規準を作成する。

ウ 指導と評価の計画（12時間）

学習評価については、教師の指導改善や生徒の学習改善に生かすことが重要であり、指導と評価の計画を立てる段階から、評価場面や方法等を考えておくことが大切である。また、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の評価の記録については、単元や題材等のまとまりの中で、それぞれの実現状況が把握できる段階で評価を行うなど評価場面の精選をすることが大切である。ここでは、「数学Ⅰ」の単元「二次関数」のうち、「二次方程式と二次不等式」の計画例を示す。

小単元等		授業時間数	
1	二次方程式、二次関数のグラフと x 軸の位置関係	5 時間	12時間
2	二次不等式	6 時間	
単元のまとめ		1 時間	

各授業時間の指導のねらい、生徒の学習活動及び重点、評価方法等は次のとおりである。

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	備考
1	・二次方程式の解の公式による解法で、約分が必要となる場合を考察することを通して、解法について体系的に理解できるようにする。	知		知①：行動観察
2	・二次方程式 $ax^2+bx+c=0$ の実数解の個数が b^2-4ac の正負によって決まることを理解できるようにする。	知		知①：行動観察
3	・二次方程式 $ax^2+bx+c=0$ の実数解について、二次関数 $y=ax^2+bx+c$ のグラフと x 軸との共有点との関係について考察することを通して、理解できるようにする。	知		知②：ノート
4	・二次関数 $y=ax^2+bx+c$ のグラフと x 軸との共有点の個数との関係について、判別式や頂点の y 座標を用いて多面的に考察することができるようにする。	思	○	思①：ワークシート
5	・小テスト ・第1～4時を振り返り、振り返りシートへの記述を通して、その後の学習を見通すことができるようにする。	知態	○ ○	知①②：小テスト 態②：振り返りシート
6	・不等式の解と関数のグラフとの関係について理解し、二次関数のグラフが x 軸と異なる2点を共有する場合について、グラフを用いて二次不等式を解くことができるようにする。	知		知③：行動観察
7	・二次関数のグラフが x 軸と1点だけを共有する場合、又は共有点をもたない場合を考察することを通して、様々な二次不等式を解くことができるようにする。	知		知④：ノート
8	・前時までに学習した様々な二次不等式の解き方を振り返り、二次不等式の解を体系的に考察することを通して粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断したりしようとしている。	思態	○	思②：ノート 態②：ノート
9	・係数に文字を含む二次不等式について、解の条件を考察することを通して、問題の解決に必要な係数の条件を表現することができるようにする。	思		思③：個人発表
10	・二次関数 $y=x^2-2mx+m+1$ のグラフと x 軸との共有点の位置について、二次不等式の解の条件から定数 m の条件がどのように変わるかを考察し、表現することができるようにする。	思	○	思③：グループ発表
11	・二次不等式のよさを認識し、身近な現象について二次不等式を活用しようとしている。	態	○	態①：行動観察
12	・単元全体の学習内容についてのテストに取り組み、単元で学習したことがどの程度身に付いているかを確認できるようにする。	知思	○ ○	知①～④：単元テスト 思①～③：単元テスト

生徒全員の学習状況を記録に残す場面

○本計画では、「知識・技能」の評価の記録を第5・12時に、「思考・判断・表現」の評価の記録を第4・10・12時に、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の記録を第5・8・11時に設定した。

「小テスト&振り返りシート」については、次ページを参照

評価する時期や場面の精選

○学習評価については、日々の授業の中で生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要である。

○観点別の学習状況についての評価は、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場면을精選することが重要である。

行動観察による評価の留意点

○授業での行動観察は見取りを確実にするために、評価規準を具体的な生徒の姿で表現する。

知：「知識・技能」 思：「思考・判断・表現」 態：「主体的に学習に取り組む態度」

(2) 「主体的に学習に取り組む態度」を評価する計画例

「数学A」において、内容のまとまりである「場合の数と確率」を一つの単元として扱う。単元「場合の数と確率」の中で、特に「確率」について、ワークシートや振り返りシートを用いて、学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面の設定を工夫した計画例である。

ア 単元の目標

- (ア) 場合の数と確率についての基本的な概念や原理・法則を体系的に理解するとともに、数学と人間の活動の関係について認識を深め、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付ける。
- (イ) 不確実な事象に着目し、確率の性質などに基づいて事象の起こりやすさを判断する力を身に付ける。
- (ウ) 確率について、数学のよさを認識し数学を活用しようとする態度、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとする態度、問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとする態度を身に付ける。

イ 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①集合の要素の個数に関する基本的な関係や和の法則、積の法則などの数え上げの原則について理解している。 ②具体的な事象を基に順列及び組合せの意味を理解し、順列の総数や組合せの総数を求めることができる。 ③確率の意味や基本的な法則についての理解を深め、それらを用いて事象の確率や期待値を求めることができる。 ④独立な試行の意味を理解し、独立な試行の確率を求めることができる。 ⑤条件付き確率の意味を理解し、簡単な場合について条件付き確率を求めることができる。	①事象の構造などに着目し、場合の数を求める方法を多面的に考察することができる。 ②確率の性質や法則に着し、確率を求める方法を多面的に考察することができる。 ③確率の性質などに基づいて事象の起こりやすさを判断したり、期待値を意思決定に活用したりすることができる。	①事象を場合の数や確率の考えを用いて考察するよさを認識し、問題解決にそれらを活用したり、粘り強く考え数学的論拠に基づき判断しようとしていたりしている。 ②問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとしている。

ウ 指導と評価の計画（21時間）

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けるために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤したりするなど、自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかという意思的な側面を評価することが重要である。

本単元は、5つの小単元と単元のまとめで構成している。複数の連続する時間で使用するワークシートを活用する例、並びに振り返りシート利用して、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する例を示す。

小単元等		授業時間数	
1	集合の要素の個数、場合の数	3時間	21時間
2	順列、組合せ	6時間	
3	事象と確率、確率の基本性質	5時間	
4	独立な試行と確率	2時間	
5	条件付き確率、期待値	4時間	
	単元のまとめ	1時間	

各授業時間の指導のねらい、生徒の学習活動及び重点、評価方法等は次のとおりである。

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	備考
1	・集合の要素の個数を、ベン図を用いて求めることができる。	知		知①：ワークシート
10	・事象や試行などの言葉の意味や「同様に確からしい」ことの意味を理解し、場合の数と関連付けて簡単な確率を求めることができるようにする。	知		知③：ワークシート
11	・様々な事柄を題材に、順列や組合せの知識を活用して確率を求めることができるようにする。	思		思②：ワークシート
12	・確率の加法定理がどのような事象に対して成立するかを考察する過程を通して、2つの事象が排反であるときに成立することを理解できるようにする。	知		知③：ワークシート ICTの活用
13	・排反でない2つの事象の和事象の確率の求め方を、和集合の要素の個数を求める過程と比較しながら理解する。また、その求め方を活用して、余事象の確率について考察することができるようにする。	思		思②：ワークシート ICTの活用
14	・小単元3の学習を振り返り、振り返りシートに記述することを通して、学習内容の定着を図るとともに、その後の学習を見通せるようにする。	知態	○	知③：小テスト、 態②：振り返りシート
15	・独立な試行について理解し、複数の独立な試行を行うとき、同時に起こる事象の確率を求めることができるようにする。 ・独立な試行と、同じものを含む順列の求め方を活用し、反復試行の確率を求めることができるようにする。	知 思		知③：行動観察 思②：ワークシート
16	・小単元4の学習を振り返り、振り返りシートに記述することを通して、学習内容の定着を図るとともに、その後の学習を見通せるようにする。 ・簡単な条件付き確率を求められるようにする。	知態 知	○	知④：小テスト、 態②：振り返りシート 知⑤：行動観察
17	・条件付き確率の求め方を式を用いて表し、確率の乗法公式を理解するとともに、その考え方が身の周りの様々な事象に当てはめられることを理解できるようにする。	知		知⑤：行動観察
18	・原因についての条件付き確率を求められるようにする。 ・言葉で表された条件を的確に読み取り、数や式を用いて表現し、条件付き確率について考察することができるようにする。	思		思②：ワークシート
19	・期待値の求め方を理解する。また、身の周りの事象について期待値を活用することのよさを認識し、期待値を意思決定に活用することができるようにする。	思態		思③：ワークシート 態①：行動観察 ICTの活用
20	・小単元5の学習を振り返り、振り返りシートに記述することを通して、学習内容の定着を図るとともに、その後の学習を見通せるようにする。	知態	○	知③：小テスト、 態②：振り返りシート
21	・単元全体の学習内容についてのテストに取り組み、単元で学習したことがどの程度身に付いているかを確認できるようにする。	知思	○ ○	知③④：単元テスト 思②③：単元テスト

ワークシート・振り返りシートの活用
の流れ

【ワークシート・
振り返りシート】

- ①小単元の導入に、ワークシート・振り返りシート（両面印刷）を配付し、「小単元のチェックポイント」から、今後の学習の見通しをもたせる。
- ②各授業でワークシートの記入欄を順に活用し、学習を体系的に理解したり、統合的・発展的に考察したりする。
- ③小単元末に小テストを行い、「小テストの結果」と「小単元のチェックポイント」を自己評価し、学習を振り返る。また、これまでの学習で最も大切だと思ったこと等の振り返りを記述する。
- ④ワークシート・振り返りシートを回収し、教師が評価を行う際の材料の一つとする。

表中の「記録」及び「備考」について

○「記録」は、評価規準に照らして、「十分満足できる」状況、「おおむね満足できる」状況、「努力を要する」状況のいずれであるか判断し、全員の学習状況を記録に残すものに○を付している。

○「備考」には、生徒の学習状況を把握するために想定される評価方法を示している。

知：「知識・技能」 思：「思考・判断・表現」 態：「主体的に学習に取り組む態度」

エ 評価問題等

(ア) 複数の連続する時間で使用するワークシートを活用する例

知識や日常の事象を数学的に捉えたことを文章等による説明をする場面を設定することで「知識・技能」や「思考・判断・表現」を評価する。ワークシートを全て記入すると小単元の学習内容を1枚で振り返ることができ、振り返りシートを記入するときに容易に振り返ることができるよう工夫している。

○①の欄は、第10時で使用使用する。
○「同様に確からしいとは」を具体的な事象を用いて記述することで、意味を理解する。(知識・技能)

○②の欄は、第11時で使用使用する。
○「順列・組合せ」で学んだ教科書の例、練習問題を、確率の問題に作り替えることを通して、「順列・組合せ」と関連付けて考察し、理解を深める。(思考・判断・表現)

○③の欄は、第12時で使用使用する。
○日常の事象から、「排反である」と「排反でない」例をそれぞれ記述することを通して、意味について理解を深める。(知識・技能)

○④及び⑤の欄は、第13時で使用使用する。
○④では、教科書の例題から、2つの事象が排反でないときの和事象の確率を求める。
○⑤では、④で考察したことと関連付けて余事象を言葉で表現し、その確率を求める。また、日常生活で余事象の考え方をを用いる場面を振り返ることで、日常での事象と関連付けて理解を深める。(思考・判断・表現)

(イ) 振り返りシートを利用して、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する例

小単元の学習を振り返って、既習の学習内容を関連付けたり、これからの学習を見通したりすることを評価する。また、個々の生徒のつまづきやすい点など把握した内容については、その後の学習指導にも生かすことができるよう工夫する。

例えば、小単元3「事象と確率、確率の基本性質」で、次のような評価の方法が考えられる。

「小単元のチェックポイント」を次のように用いることが考えられる。
○小単元の導入で示すことで、生徒が学習の見通しをもつ。
○小単元末の小テスト後に、チェックポイントに自己評価を記入させることで、生徒が自らの学習状況を把握する。

小単元の学習を振り返るために、ノート等を見直しながら次のことを記述する。
○最も大切だと思ったことは何か。なぜ、そう思ったのか。
○よく分からなかったこと
○この小単元を学んでの感想

生徒が具体的に記述できない状況がある場合には、机間指導の際には、教科書やノートを見ながら「どれが自分にとって必要なポイントだと思いましたか」等と問いかけ、振り返るよう促す。